知恵の樹

No. 170 2012. 9. 19

町田の図書館活動をすすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12　増山方
〒194-0022　FAX　042-722-1243

10 月 17 日(水)「鶴川駅前図書館」いよいよオープン!!
―構想段階から５年間、市民の立場で関わって―

鈴 木 真 佐 世

新しくできる鶴川駅前図書館は、「和光大学ポプリホール鶴川」とネーミングされた(後述)町田市文化施設(鶴川緑の交流館)の2階に入ります。この複合施設の建設に構想段階から関わり、ようやく9月に開館記念式典が行われることになりました。

町田市のこの施設は、鶴川駅から徒歩 2 分の利便性のよいところに建ち、地上 3 階、地下 2 階の複合型文化施設で、地下には音響性能の優れた 300 席のホール、3階には多目的室・リハーサル室・エクササイズルーム・会議室等の貸室、1階には、市役所鶴川駅前連絡所・市民交流スペース・プレイルーム(兼会議室)が入ります。

私は、2007 年7月から5年間市民ワークショップメンバーや検討委員会のメンバーとして関わり続け、私たち市民にとってどのような施設、図書館であってほしいか、建設の構想段階から、基本計画、管理運営など検討段階まで多くの意見を出してきました。これらのことは本会報「知恵の樹」にも今までに 3 回ほど書かせていただきましたので、今回は、2011 年4月号に寄稿した後、新たに決まったこと、8 月からスタートした開館準備委員会(メンバーは、学識経験者3名、公募市民3名、様々な組織の代表 5 名の計 11 名)で検討してきたこと、構想段階から市民が参加したことの意義、図書館のおはなし会の計画などをご報告いたします。

開館準備委員会・開館記念事業準備委員会

開館に向けて、開館行事の時期と方向性・そのための実行委員の募集について、10 月から 12 月のモニター利用の募集の仕方とその期間に使い勝手・問題点などをチェックするためにとるアンケートの内容などを検討してきました。

並行して、2月 24 日に発足(今年 1 月に募集)した開館記念行事実行委員会は、月2回のペースで集まって、各自が提案したたくさんの企画の中からいくつかに絞って準備を進めています。その中で語りや朗読の企画も実現されそうですので、楽しみになさっていてください。

前回(8 月 20 日)の開館準備委員会では、1 階の市民交流スペースとサロンの使い方がやっと取り上げられました。地下のホールも3階のホールも有料で借り手が占用するスペースですが、1 階の交流スペースとサロンは基本的に無料で市民の誰でもが利用できるスペースです。それゆえ、市民活動と交流に上手に利用してもらえたらと、運用に向けてのルール作りを検討しました。

交流スペースは、展示台と展示パネルが用意されており、市民の作品の発表にも使えます。市民活動の情報発信のスペースを確保して欲しいということは繰り返し発言してきましたが、建物の中心にある大きな壁(メガシェルフ)の壁面にチラ

シを置ける豊富なスペースが確保できるということです。また市民ワークショップの際に、子どもが安全に遊べるスペースをという多くの人の声を受けて実現したプレイルームは 1 階の隅にできましたが、一般の会議室と同じに有料貸し出しの運用施設になってしまいました。せめて、予約が入っていない時にはオープンにして子ども達が使えるスペースにしてほしいとう意見を出しましたが、実現されるかどうかわかりません。市民のための施設になるように、勇気を出して、発言したり、メールしたりして、市側に考えていただけるよう、最後まで頑張りたいとおもいます。

ネーミングライツのことなど

管理運営計画の検討委員会が 2011 年 3 月に終了した後、ホールを経済的に支えるためとはいえ館名(愛称)にネーミングライツを採用したことは納得のいかないことでした。これらのことは、今までの市民ワークショップでも管理運営の外部検討会議でもまるで検討されなかったことで、このような大事なことが市民の関与できないところで決められたことはとても残念なことでした。

ほぼ毎月 1 回のペースで開かれた開館準備委員会ではネーミングライツのことは本来の議題ではなかったのですが、スタジアム等のスポーツ施設とは違い、多額の税金を使って文化と市民交流のために建てた市の施設が、ネーミングライツを契約した企業の建物と誤解されかねないことは重大な問題だと市民委員から市側に質問や抗議の発言が相次ぎました。

(詳細は、町田市の HP の中の鶴川緑の交流館に関すること→開館準備に関すること→開館準備委員会→第 5 回会議事録をごらんください)

私も、ネーミングライツに頼らずに市民からの資金援助を得られる方法をいくつか提案したりしましたが、すでに市側はネーミングライツを募集しており応募があったこの時点での変更はできませんでした。結局、せめてオープン後しばらくは町田市の施設であることを併記したらどうかという提案が採用され、「町田市文化施設」という言葉が「和光大学ポプリホール鶴川」の名前の前につけられることになりました。

現在鶴川地域には鶴川団地内の「鶴川図書館」がありますが、利用の増加に伴い同じサービスエリア内に新たな図書館の建設が求められていました。2000 年に移転開館した金森図書館以来、12 年ぶりに市内7館目の市立図書館「鶴川駅前図書館」が誕生します。蔵書規模は市内第4位で、地域の中心館として図書館サービスを向上させ、情報拠点の役割を果たします。地域の交流拠点である複合施設の一翼を担い、地域活性化を支援し、さらに駅前の立地を活かし、中央図書館同様、夜間開館を行います。

2F施設案内

鶴川駅前図書館の概要

【所在地】町田市能ヶ谷 1-2-1
【床面積】1,190 平方メートル
【蔵書冊数】約 90,000 冊(当初 60,000 冊～)
【図書閲覧用座席数】50 席
【開館時間】火・水・金〔10:00～20:00〕/
木・土・日〔10:00～17:00〕
祝休日 〔10:00～17:00〕

※休館日、利用条件、資料の貸出数や貸出期間などは市内の他の図書館と同様です。

構想段階から市民が参加したことの意義

市民が自由に使えるはずだったエクササイズルームやプレイルームは貸し室に、子育て世代の集まりに必要な託児室は、無料や優先料金ではなく、一般の貸室と同じになってしまいました。ワークショップや委員会での話し合いは受け入れられず、貸し施設の利用料、特に20～30 人規模の会議室が、3000 円～4500 円と、市民センター利用料の 10 倍近い額になったことなど、市サイドで決定し、条例に盛り込んでしまったことはとても残念でした。

振り返ってみるに、ワークショップや検討委員会では建設費、運営費など、経済・資金面についてオープンになっていない状態で検討した為ではないかと思います。可能な範囲で経済的な面も解った上で検討できたなら、資金的に不可能だとあきらめたりせずに、例えば美術館などで行われている市民の寄付や友の会のような支援組織を組むとか屋上を太陽光発電に貸す等、資金面を克服する案を色々提案・検討できたのではないかと思います。

最大の難関は経済的なことでしたが、市は、財政難の中でワークショップや委員会が提案したこ

とは可能な限りずいぶん採用しようと努力されたと思います。たくさんの市民が関わることで、市職員やコンサルタントだけでは生まれなかった案が出され、実現に至ったことも種々あります。私自身もずっとかかわり続けられて本当に良かったと思っています。

オープニングイベントと今後のおはなし会

図書館は、嬉しいことに直営で運営されます。そのこともあって開館準備委員会ではほとんど検討されることがありませんでした。けれども図書館には、柿の木文庫としておはなし会などの協力を申し出ていましたので、6月から正式に活動を開始した図書館の開館準備スタッフから、新しく計画しているおはなし会のお知らせと協力依頼がありました。

10 月 17 日のオープンの日から、連続して 5 日間子ども向けのおはなし会を開催する計画で、そのうちの4日間(20 日は図書館員のブックトークと乳幼児向けおはなし会)のおはなし会に柿の木文庫からも毎回語り手として参加します。そして、現在鶴川団地の図書館では毎月第2と第4水曜日の3時からおはなし会を開いていますが、駅前図書館でも第1と第3水曜日の3時からおはなし会を計画しており、文庫からもおはなしボランティアとして協力することになっています。たくさんの方がこの建物に足を運び、子ども達がおはなしや本の楽しさを知ることができるように文庫一同できるだけ協力したいとおもっております。

(鶴川在住／柿の木文庫所属)

田井郁久雄氏講演会「市民のための図書館を求めて」を聞いて

去る8月 26 日(日)14:00～、多摩市永山公民館において、多摩市に中央図書館をつくる会主催による表記の会が催され当会から6名が参加した。これは、多摩市の図書館が昨年4月より行財政改革の切り札として試行している窓口業務委託(1館)や嘱託職員のみの運営(1館)が、新たな運営形態として、「市民の図書館」としてあり続けることが出来るのか、市民に親しまれ役に立ちより専門的で質の高い図書館サービスを継続していくことが出来るのか、を学ぼうと企画したものである。紙面の関係で詳しくは次号に報告予定だが、参加しての感想を少しだけ。　(増山)

町田でも2度ほどご講演頂いたことのある講師の田井さんは、多くの図書館現場に足を運び、経営面や図書館職員問題の面から鋭く論じ、社会の時流に乗った民営化や基本を忘れイベント重視に走る図書館サービスが果たして市民の図書館といえるのかと、警告を鳴らしておられる。

専任職員・資料費の削減による行革の進行、図書館総経費の変化、日本の図書館の利用の推移、をグラフで示されて図書館を取り巻く厳しい状況を話されたが、このグラフを見る限り、民営化をしなければ運営できないどころか、なぜ市民の税金が企業の営利につながっていくのかと率直な疑問がわく。企業は儲けのない仕事に手を出さない。市が企業に支払う委託費は、図書館運営だけではなく企業の儲けも含まれているのだ。

また、自ら仕事を見つけて積極的に市民の役に立とうという動きのないカウンター職員の映像から、民営化の重要な問題点としてカウンターサービスの弱体化を挙げられたが、管理運営の継続性も絡んで、決められたこと以外手を出してはいけないという、委託側職員の消極的な仕事の有り様を見た思いがした。

田井さんの話をうかがうたびに、行政管理職や図書館職員に聞いてもらい、考え頑張って欲しいとといつも思う。本が嫌い、コミュニケーションも苦手という職員が図書館に異動させられ、職員数に加えられ、予算がないから職員を減らし資料費を減額するという政策がどこの自治体でもまかり通っている。市の職員は、どのセクションにおいても専門職であって欲しい。その仕事に精通した職員が必要数だけいればいい。仕事が出来る職員集団を作っていくことこそ行財政改革の筆頭に持っていくべきではないのか。根本を改めずに対処療法的な行革を推し進め、競争原理をあおってワーキングプアーを生み出し、市民の基層文化がどんどん劣化されつつあるとしか思えないこの流れを、勇気をもって断ち切って欲しいと祈るような気持ちになった。会場は、補助いすを出すほど超満員。その中に、立川市の新図書館長のお顔が見られ他市ながら嬉しく思った。M⁴

「トキを見守って 30 年
ーノンフィクション児童文学はおもしろい！ー」

講師：国松 俊英 氏

主催：町田の図書館活動をすすめる会＆野津田・雑木林の会
共催：町田市立図書館　参加者：48 名(内子ども 2 名)

うだるように暑かった去る 7 月 28 日(土)14:15～16:20、町田市民文学館大会議室において表記講演会を行いました。予定会場の空調設備故障のため場所を変え 15 分遅れで開会しました。はじめに、図書館の吉岡担当課長より、中央図書館ホールの冷房が効かなくなり修理が間に合わないため、会場が急遽変更になったことのお詫びと「夏休み子どもフェアー」が 9 回目を迎えたことを話され、町田の図書館活動をすすめる会と野津田･雑木林の会の尽力に感謝するとして、今日を機会にどんどん図書館を利用してもらいたい、との挨拶がありました。

そして、司会の手嶋孝典氏より、講師の紹介があり、講演に入りました。

国松氏のプロフィール

1940 年滋賀県生まれ。同志社大学商学部卒業。1989 年より町田在住。日本児童文学者協会、日本野鳥の会、町田の図書館活動をすすめる会、会員。野鳥や自然を題材にしたノンフィクション作品を多く発表。町田市立図書館は国松氏の著書(紙芝居、単行本等)を 150 点以上所蔵。『トキよ未来へはばたけ ニッポニア・ニッポンを守る人たち』(くもん出版)で第 7 回福田清人賞受賞

小学生の頃から図書室を利用していたといわれる国松氏は、今も図書館が大好きで、仕事上も図書館は大事な場所だとおっしゃる。今日は「トキ」の話を中心に「ノンフィクション児童文学」にも触れたいと、30 年間見守ってこられたトキの美しい映像をスクリーンに写しながら、話された。

野生動物に関心を持つ

30 歳の頃、千葉県船橋市の東京湾の傍の団地に引っ越した。翌年、東京湾の埋め立てが始まり、東京湾の自然を守る運動をしている「千葉の干潟を守る会」に入って、自然観察会に参加した。好奇心旺盛な私は、双眼鏡と図鑑を買ってきて、バードウォッチングに夢中になった。1980 年 2 月号から毎月、日本各地の野性動物保護の現場を訪ねて、その現状を「私たちの自然」に報告するルポを書き始めた。北海道から九州まで、いろんな所へ出かけていく中で、日本の野生動物は年々棲息地を奪われ、追いつめられているのを強く感じ、このままでは滅びてしまうという危機感をもった。

「トキ」という鳥について

コウノトリやサギの仲間でシラサギより足が短い。顔には羽毛がなく赤い肌が出ている。頭に冠のような羽が生えている。くちばしが長く、下にまがっている。つばさはオレンジがかったピンク色。　トキは標準和名で日本だけの名前。ニッポニア・ニッポンは学名で世界共通の名前。

江戸時代は鳥やけものを保護する制度があったためか、トキは日本中に棲んでいた。明治時代からだれでも鳥やけものの狩猟をやってよいことになって、どんどん少なくなり、1967 年佐渡島にトキ保護センターがつくられ、本格的なトキの保護と人工増殖が始まった。当時日本には、佐渡に 12 羽、能登に 1 羽のトキがいた。

トキのことを調べ始める

14 年後の 1981 年 11 月、雑誌の取材で初めて佐渡島のトキ保護センターを訪ねたが、その年、野性のトキ捕獲作戦が行われて、前からいたキンちゃんを入れて 6 羽いたが 5 年後には 2 羽になってしまった。取材が終わってからも佐渡を訪ねたことで、トキに興味を持ち、トキのことを調べようと思った。

1993 年に新しい保護センターができた時は、ミドリとキンの 2 羽、1995 年にはキン 1 羽になり　キンは、2003 年 10 月に亡くなってしまった。

ここで、国松氏による電子紙芝居「さいごのトキ

キンちゃん」(国松俊英脚本　黒川光広画/童心社)上映。会場の全員が熱心に聴き入った。

1999年1月、中国政府から若いトキのペアを贈ってもらい優優が生まれる。毎年ひなが孵りどんどん増え、2006年には100羽になった。2007年に里山を切り開いて「野性復帰ステーション」を作り、2008年には10羽を試験放鳥。今年、放鳥されたトキから初めてひなが孵り、8羽が巣立った。

『トキよ未来へはばたけ』 出版

これまで佐渡に通ってトキのことを勉強してきたが、今年で30年になるので、トキのたどった道、トキ保護に力を尽くしてきた人たちのことをまとめて『トキよ未来へはばたけ』という本を出した。忘れられない人たちに、センター長の近辻宏帰さん、飼育員の高野高治さん、獣医師の金子良則さん、トキの研究家佐藤春雄さんがいる。

《Q＆A》

Q:トキはどのように増えていっているのか？　また、エサはどのようにしているのか？

A:現在200羽ほどいる。一般公開はされていないが、トキは佐渡だけではなく、全滅を防ぐため分散飼育をしており、多摩動物公園や新潟県長岡市の動物園、能登半島の動物園でも飼育し、そこでも増えていっている。トキが自然の中で育つように、自然の中のエサが足りているかどうか心配している。佐渡の農家はできるだけ農薬を使わないで稲作をし協力をしている。その無農薬米「トキヒカリ」を私は購入し農家を応援しているが、関心のある方はインターネットで「めだかの学校」を調べて欲しい。

Q:トキは何年くらい生きるのか？

A:野性のトキは数年から7,8年くらい。保護センターでは10年から15年くらい。

ノンフィクション児童文学について

ノンフィクションもいろいろなジャンルがあるとして、たくさんの本をジャンル別に紹介してくださった。

子どもの本には、絵本・おはなし(作者が考えて書いた日常生活の物語・・・リアリズム／　空想物語・・・ファンタジー)／ノンフィクション(本当にあった話)／少年詩　童謡／戯曲／再話(昔話や神話を子ども用に書いたもの)などがある。

ここでは、国松氏の子ども向けノンフィクション作品の一部をご紹介する。

『ペルシャ湾の水鳥をすくえ』(金の星社)／『カラスの大研究』(PHP研究所)／『お江』『平清盛』(岩崎書店　フォア文庫)。

ここ数年、NHK大河ドラマを主題にした児童向けノンフイクションを書いており、現在は、来年放映が決まっている大河ドラマ「新島八重」(新島譲の夫人)について執筆中。新島譲は、(国松氏出身の)同志社大学の先輩だけに、思いも強く、膨大な資料からどれを削るか頭を悩ませている。

11月には書店に出ますので、ぜひ買って読んでみて下さい。

―お話を聞いて―

実はあまりトキについて興味がなかった私でも、とても分りやすく、本当に好きな事を仕事にされているんだなと思いました。また、子どもたちに好きな事を職業にすることの素敵さと大変さが伝わったと思います。次回は仕事場風景なども拝見できるといいなあと思いました。(中央図書館嘱託　長谷川)

国松先生が、講演の初めに「私は図書館が大好きです」と言われたことで、とてもうれしい気持ちになり、先生に対して好感を持ちました。(私も、図書館大好きな一人です)。

「トキ」のお話は、大変興味深く、30年に亘ってトキや佐渡の人たちと関わってこられたことを楽しそうに(ご苦労もたくさんあったことと思いますが)笑顔でお話される姿に先生のお人柄を感じました。

また、児童文学者として長年、子どもたちのために、ノンフィクション文学の分野で創作を続けられておられますが、これからもお元気でたくさんの作品を発表していただきたいと思いました。そして、多くの子どもたちに本当にあったお話を読んでもらいたいです。

今回の講演会に子どもの参加が少なくて残念でした。国松先生実演の電子紙芝居、大人の私も楽しみました。ありがとうございました。

(中央図書館嘱託　斉藤喜美子)

今日は、2つの講演会を聞いたような、得した気分でした。1つがトキの話。もう一つが、児童のノンフィクションのブックトーク。

講演会のあと(飲みにご一緒しました)の国松さんの話も興味深かったです。新島八重の会津のことももっと知りたくなりました。　(石井／会員)

(記録:斎藤・長谷川／文責:M⁴)

「図書室巡れば、高校が見える」

都立広尾高等学校・司書教諭　鈴木　薫

2012 年 7 月 4 日の東京新聞に、本校の図書室が載った。「学校図書館スタンプラリー」の企画を、本校の司書が企画したためだ。

この企画には、都内 13 の都立・私立高校が参加し、8月 20～24日の間図書館を公開していた。目的は、中学生の受験校選びに、図書室の特色を役立ててもらうこと。その期間中に、いろいろなイベントを企画し集客を図る。一例として本校の企画を羅列すると、・元中学校司書を招いてのブックトーク ・卒業生による語り ・本校図書委員と一緒に、しおり作りなどを行う委員活動体験 ・司書教諭である私が作った図書館調べ物クイズ、など。他校でも、三省堂書店による POP 講座や作家・橋本紡氏の講演などが目玉として企画されていたようだ。

東京新聞に取材を受けた後、日本教育新聞からも取材があった。どちらの記者も、「どうしてこのような企画をしたのか」と問う。きっかけは、本校司書が、一昨年に大阪府内で行われた図書館一斉見学会に触発されたからだ。「図書館を見て、高校を選んでもらうというのは、新しい視点ですね」と記者は関心したようにいうが、肝心の中学生家族にはどの程度反応があるものか。実際のところ、私はそんなに反応はよくないのではないかと考えていた。「スタンプラリー」というからには、スタンプを求めて図書館をめぐるのが趣旨だ。2校回れば、特製しおりとブックリストがもらえる。では、もし自分が中学生だったら、特製しおりとブックリストが欲しくて炎天下のなか、離れた2校の図書館に行くか？　たぶん、出不精の私だったら行かない。図書館を見たくないわけではない。志望校の図書館ならなおさらだ。でも、図書館を見なくても志望校は決められる。ブックリストも、くれると言えばもらいたいが、取りに行くかといえば、そこまでして欲しくもない。

企画者側の私は、当然、図書館教育の重要性を感じている。新指導要領では「言語力」や「表現力」が打ち出されてきた。これに図書館の出番がないはずがない。でも、その言語力・読解力の宝庫である図書室がどれだけ優遇されているかといえば、未読率の調査を根拠に、研修を強制されるくらいで、教師一人一人の授業研究の中で、これまで以上の理解を得られているとは思えない。かくいう私も、図書館を利用した授業はできていないし、今回の企画が図書館を使った取り組みの初めてであった。

集客を期待できない気持ちと、重要性を認知して欲しい使命感の中で、本校における結果は、4日間で 53 名の参加を得た。うち中学生は 11 名。その他、小学生や大学生、半数は公立図書館司書など、図書館関係者である。来校者の多くは、新聞を見てやってきたそうだ。また、教育委員会関係者も、来校するという話だったのだが、少なくとも本校にはやってこなかった。司書は、思いのほか来校者数が少ないと肩を落としていた。だが、来校者の中には、図書館に対して熱心な保護者もいた。私の主催した調べ物クイズを、子どもと一緒に取り組んでくれる保護者の姿は、学校教育の中での図書館がまだ見捨てられていないという確信につながる。

4 日間が終わって、司書は今年限りの企画にしようかとこぼしていたが、私は来年もやるべきだと主張した。全体からみれば、学校図書館は今、見直されようとしている時期なのだと思う。「見直される」ということは、まだ見ていないという人も多い現状だが、こっちを見ろと主張すれば見てもらえる可能性が高い、ということだ。学校教育の中の伸び代といってもいい。今年 50 名だったのだから、来年は 80 名。再来年は 110 名と、目指せばいいではないか。課題は、広報である。直接、中学生に伝わる方法で周知し、参加校を増やして、中学生側のニーズをリサーチすること。これが来年開催への改善点だと思っている。

さらに、内輪の課題を付け加えるならば、本校の司書は今年度で定年退職となる。私は来年度の開催を主張しているが、それも司書の力あってのこと。東京都の学校司書が民間委託される波が近づきつつある中で、本当に来年度も図書館を開放できるのか。「図書館巡れば、高校が見える」。その図書館には司書がいて欲しい。内外どちらに対しても、司書の必要性と存在感を強く感じる企画であった。　　（会　員）

町田の学校図書館を考える会　７月定例会＜14(土)10：30～12:30＞　報　告

於：まちだ中央公民館6階ﾌﾘｰｽﾍﾟｰｽ　出席者：蘆田・市川・清水・谷釜・伴・水越

（1）市教委主催の学校図書館担当者研修会（7/2・月／於：中央図書館）について　（水越）

本会が5月に市教委教育部長と面談した際に、請願が通ったとはいえすぐに学校司書を公募で配置するという考えはないが、ただ研修についてはその必要性や重要性を十分認識しているので、いろいろと工夫していくつもりであることを口頭での回答として頂いていた。今回はこの研修の前に、各学校図書指導員宛に「研修内容についてのアンケート」が実施されたこともあり、その内容や持ち方に期待する気持ちもあった。場所が教育研究所から交通に便利な中央図書館になったこともあってか、100 名を越える参加者であった。

冒頭、市立図書館長が挨拶し、市立図書館としても学校図書館をこれまで以上に支援していくつもりであることや、現在市立図書館協議会でも「学校図書館との連携」について討議していると話されたことからも、研修の新しい展開は感じ取れた。

しかし形式は、玉川大学井出一雄教授の講義（質問の時間なし）と、事前に市教委によって分けられた9つのグループでの協議会の後、流れ解散であった。このため参加者数人から、各グループに分かれての協議のあと、そこで話し合われたことを全員で共有する場を設けてほしいとの意見が出されたが、残念ながら見送られた。

井出教授による講義は、世田谷区の小学校図書館の実践報告（読書活動や図書館装飾などの工夫）とボランティアによる地域開放の話で、地域解放を進めたい意向があるのかなんなのか、講義の主旨が理解できなかった。装飾などの工夫は、町田でもすでに多くの図書館で行われていることで、正直取り立てて新鮮味は感じられなかった。

9つに分かれての協議会のテーマは、ⅰ）図書指導員の活動の情報の共有　ⅱ）訪れたくなる図書室にするための環境整備　ⅲ）充実した学習活動にするための支援　ⅳ）子どもがよく読む本・子どもに読んでほしい本　ⅴ）子どもが集中する読み聞かせ・ブックトークなどで、これは事前に行なわれたアンケートの回答によるグループ分けとの説明があった。しかしアンケートはあくまでどのような研修を希望するかを問われたものであって、こうしたグループ分けに使われるものとは知らされていなかった。

前回までの研修では、地域ごとに分かれての話し合いが行なわれることが多く、毎回同じ顔ぶれという欠点もあったので、テーマ別で行われたことは新しい工夫と言える。しかし主催者が事前にグループ分けしたのであれば尚更、そのあとに全体会がなかったことは大変に残念だった。アンケートの集計結果がまったく公表されないことにも違和感を持った。

学校図書館がひとり職場であること、指導員同士の交流が必ずしも十分には行われていないこと、さらに外部での講習・学習会に参加する指導員がけっして多くないことなどからも、市教委主催の研修にはとても大きな価値がある。司書教諭が同席する意義も大きい。会としては今回の研修の反省を単なる不満として留めず、一層充実した研修も含めて再度市教委と前向きに面談を求めていきたい。また PTA などを通じて、保護者に賛同してもらう機会をもっと増やすことなども計画していきたい。

（2）学校司書の法制化の動き：学校図書館活性化協議会が、学校司書の法制化を目指して

学校図書館活性化協議会が、学校司書の法制化を目指して学校図書館法改正案を提出する動きがある。「学校司書」という職名を正式に法律に載せることは、法的根拠のないまま仕事する学校司書にとっては朗報ではあるが、その内容如何では逆に足かせになることも危惧される。学校図書館を考える全国連絡会では、関係する諸団体などとも随時話し合いを持ちつつ、法改正に向け活動しているとの事。情報があり次第ご報告する。　（報告：事務局）

ひろば

・7/12(木)10:00～ 国松氏講演会に向けて中央図書館児童フロアーに作品イラスト展示＆辻氏講演会配布資料印刷 （作業：伊藤・玉目・増山・丸岡）
・7/14(土)14:00～辻由美氏講演会 （169 号報告）
・7/18(水) 7 月例会 （170 号報告）
・7/25(水)13:00～会報 169 号印刷 ＆ 国松氏講演レジュメ印刷 （作業：伊藤・玉目・増山・丸岡）
・7/28(土)14:00～国松氏講演会 （170 号報告）
・8/9(木)10:00～国松氏の児童フロアーの展示撤去 （作業：伊藤・玉目・増山・丸岡・久保・堀江）
・8/22(水) 8 月例会「夕涼み会」
・9/19(水) 18:00～9 月例会（会報 170 号印刷）

7月例会報告／18(水)18:00～20:30 中集会室
1週間遅れで会報 169 号印刷

出席：石井・伊藤・齋藤・鈴木・玉目・手嶋・長谷川・増山・丸岡・桃沢・山口

● 7/28（土）国松氏講演会について打合せ
・資料印刷について ・役割分担等

● 7/14（土）辻さん講演会を終えて／職員に多く参加して欲しく市職労との共催にしたが、常勤職員の参加は、一人だけ（嘱託職員の顔はチラホラ見られた）。忙しいのは分かるが、もっと学ぼうとする姿勢をもってほしい／会計報告

● 会報について／8 月休刊、9 月例会時発行

● 市民がつくる図書館政策について／今までの活動を今後にどう活かすか。公開学習会を企画し、市民にとって、職員にとってのベストな図書館政策を作ろう／図書館運営体系・・・嘱託職員の増加にともない嘱託制度を考えていかなくてはいけない／力のある常勤職員の負担が大きくなっており職員内の格差が見られる／実現可能な状態で直営を続けるには？メリット、デメリットをまとめて、デメリットの解決策を考えよう。

● 近況報告／久しぶりに鈴木さんが出席。7/27（金）高校生書評大会（東京都教育委員会）、8/20（月）～8/23（木）中学生向け高校図書館巡りスタンプラリーについて。（6p報告）

● かえで文庫は、7/4（水）七夕会を実施し、約 30 人参加した。仮の部屋での文庫活動だが、子どもたちは楽しみに来てくれている。

● 「図書館協議会」関係／今年 10 月頃、3年に 1 回の利用者アンケートを実施予定。現在、図書館評価に取り組んでいる。

8月例会報告 22 日(水)18:30～ 「熊」にて
「吉岡氏昇格祝い」を兼ねて恒例の夕涼み会。職員（吉・手・大・黒・高・田・斉・長/守・石）、市民（玉・国・伊・片・久・鈴・増・丸・桃）の総勢 19 名参加。
初顔合わせの人も多くいましたが、おいしい料理を食って飲んで喋って、それぞれが図書館への思いや近況を語りあい大いに楽しみました。

169 号訂正とお詫び
8p最後下6行目「専門性がなければ」。下3行目「自治体直営の図書館でなければ管理運営できないであろう…」下線部分が抜けていました。（M⁴）

2012 年度 第7回 **文学館（主催）で楽しむ**
おとなのためのおはなし会
10 月 18 日（木）10:30～11:30
町田市民文学館 2F大会議室
プログラム （通算 64 回）
＊町田ゆかりの作家「吉目木晴彦」 砂川とき江
＊ジーリコッコラ（イタリアの昔話） 西村敦子
＊「地獄からもどった男」（日本の昔話）山本由佳
＊「小僧の神様」（志賀直哉作） 税所紀子
直接会場へどうぞ！ 無料 保育有
（町田市民文学館☎042-739-3420）

かえで文庫まつり
9月 29 日（土）11:00～16:00
成瀬センター第2会議室
かえで文庫（元学童建物）
◇11:00～12:30 ・バザー
・古本市（子どもの本）
◇11:00～あそびコーナー
（昔あそび・おりがみ etc.）
♫ コーヒー＆手作りケーキ
・・・各￥100
◆14:00～15:00 おはなし会
参加は無料
かえで文庫/伊藤（725-3940）
砂川（729-8728）

「市民の図書館」の原点を探り、
未来につなげていきましょう！
公開学習会「**市民と図書館**(仮)」
10 月 20（土）14:00～16:30
中央図書館 6F ホール
町田の図書館は市民主導で発展してきました。桃沢洋子さんを中心に、町田の図書館運動の歴史（浪江虔氏の足跡）に学ぶ学習会を開催します。農民運動・農村図書館・日本で最初の文庫誕生、親子読書会・・・。本会前身の「市立図書館をよりよくする会」が果たした役割・・・etc。
当日直接会場へどうぞ！ 無料
問合せ：事務局(042-722-1243)へ